**中古中国語の舌内入声を考える**

**ー中期朝鮮語の音価を考える（その3）ー**

**2017.5.24**

目次

1. はじめに　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　p2
2. 現代中国語の閉鎖音韻尾について　 　　　　　　 　p2
3. 中古音の入声について　　　　　　　　　　　　　　p4
4. 入声韻尾の消滅を考える　　　　　　　　　　　　　p6
5. 日本語のツの発音について　　　　　　　　　　　　p7
6. 謡曲におけるツの発音について　　　　 　　　　　p8
7. 平曲・御文や声明のノムの発音について　　　　　　p11
8. 『捷解新語』の入声表記を考える　　　　　　　　　p14
9. 『捷解新語』の初声を重ねる注音法とは　　　　　　p18
10. 中古舌内入声はtではない　　　　　　　　　　　　p20

【注】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　p21

【引用書】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　p26

1. はじめに

中世のキリシタン宣教師たちが編纂した『日葡辞書』（1603年）には「Connit.コンニ*ッ*（今日）　Connichi（今日）に同じ。今日。」（土井ほか編訳　1980：147）と音節末の閉鎖音韻尾（舌内入声）をtで表記しています。またジョアン・ロドリゲスの『日本大文典』（1604－8年）には「Connitta（コンニッタ）/Connichiua（今日は）」（土井訳　昭和30：637）の記述がみられます。そこでこれらの記述から中国語舌内入声音を奈良時代以前、以後に借入し、その後それらの入声韻尾は1600年頃までtとして日本語に存在したとみられています。しかしこの中国語舌内入声がtであったという通説（注1）は第4節でみるように疑問があります。戦後早や70年が過ぎ、ロボットが人間とコミュニケーションをとる時代です。この通説はいま一度考え直す必要があるでしょう。

　そこで今回は中古中国語の舌内入声について考えていくことにします。

1. 現代中国語の閉鎖音韻尾について

　まず中古舌内入声の問題を考える糸口として、現代中国語の閉鎖音韻尾をみてみると、次のように分類されています（詹　昭和58：52-3）。

1. 閉鎖音韻尾-p,-t,-kを完全に保存しているもの。粤方言,客家方言,閩方言の中の閩南話の一部（厦門など）等々。ほかに,江西臨川は-p,-t, -ʔ三組をもち,広東潮州は-ʔ,-p,-k三組をもっている。
2. 閉鎖音韻尾を保存するが,変化して一個あるいは二個の閉鎖音韻尾に合併しているもの。呉方言（蘇州,-ʔ）, 贛方言（南昌, -t,-k）,客家方言（粤東興寧, -t,-k）,閩方言の中の閩東（福州, -ʔ）など。（以下、略）。
3. 閉鎖音韻尾はすでに失なわれているが、旧入声韻の字はそれ自身なおひとつの調類をなしているもの。湘方言,閩方言の中の閩北方言（建甌など）, （以下、略）。
4. 閉鎖音韻尾を保存せず、調類のひとつとしての入声をも保存していないもの。たとえば北京の「入派三声」〔原注6〕（注2）など。北方方言区の大部分の地区もまた閉鎖音韻尾をもたず, 入声調類ももたない。
5. 一部の地方には, 旧入声韻の字が部分的に閉鎖音韻尾を喪失して鼻音尾韻に転化しているものがある。鄂東南通城話における咸,深,山,臻摂の入声字は-n韻に読まれ,それに対応する舒声韻の字と発音が同じである。たとえば,

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 入　　　　　声 | | | | 舒　　　　声 | | | |
| 質 | tsən | 十 | sən | 真 | tsən | 甚 | sən |
| 立 | d‘in | 急 | tɕin | 林 | d‘in | 今 | tɕin |
| 納 | nan | 抜 | b‘an | 貪 | d‘an | 盼 | b‘an |

＊声調記号は省略。

ここで現代中国語各方言の閉鎖音韻尾をみてみると、次のようになっています（上書：54）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 「鴿」 | 「割」 | 「各」 |
| 北方方言 | 北京 | kɤ | kɤ | kɤ |
| 西安 | kɤ | kɤ | kɤ |
| 太原 | kəʔ,kaʔ | kəʔ,kaʔ | kəʔ,kaʔ |
| 成都 | ko | ko | ko |
| 南方方言 | 蘇州 | kɤʔ | kɤʔ | koʔ |
| 梅県 | kap | kot | kok |
| 広州 | kap | kɔt | kok |
| 厦門 | kap | kat,kuaʔ | kak,koʔ |
| 福州 | kaʔ | kaʔ | kauʔ |

＊「鴿」：合韻əp。「割」：曷韻at。「各」：鐸韻ak。声調記号は省略。  
＊ローマ字注音は主に『音注韻鏡校本』（藤堂・小林　昭和46）を使用（以下、同じ）。

ところで広東方言の閉鎖音韻尾については次のような観察があります（千島・片岡共訳　2000：22）。

「語末つまり,音節のおわりの閉塞子音は破裂しないで終わる（開放されない）。（略）結果として閉塞閉鎖音は三つしかない。-p,-t,-kの三つである。これらは区別が難しいことがあり,英語話者にとっては三つとも全部,声門閉鎖音に聞こえる傾向がある。しかしこれらは弁別的で,次のようなセットがある：

「sāp　　‘‘湿’’　湿った（緝韻ɪĕp）  
sāt　　‘‘失’’　失われた（質韻ɪĕt）  
sāk 　 ‘‘塞’’　詰め込まれた（徳韻ək）」  
　＊（　）内は筆者の補筆。

また広東方言の閉鎖音韻尾kは「（d） -k→-t,baak→baat‘‘百’’「百」, bāk→bāt‘‘北’’「北」」（上書：42,22）のようにtと交代することがあり、「sāk chē‘‘塞車’’「混雑・車＝交通渋滞」はもしも語末が閉塞音の-tとして発音されたり知覚されたりすると，sāt chē‘‘失車’’「なくした車」と同じに聞こえる。この現象は若い世代の話者の間で広く行き渡っているよう」（上書：同ページ）です。  
　また閩方言に属する台湾中部人の閉鎖音韻尾の発音にたいして古くは次のような有坂氏の観察があります(有坂　昭和32:602-3)。

「（略）臺灣の入声の場合には、中心母音の終で息が一度弱まると、もはや再び強まること無く、弱まつたままでp, t, k の閉鎖が作られるのである。故に、韻尾p, t, k は殆ど聞えず、或は殆ど聲門閉鎖音かと聽き誤れる位である。p, t, k の閉鎖は、勿論ごく柔かに作られる。且、聲帯の振動は、p, t, k の閉鎖が作られて後に始めて止む。(略)つまり、「短促」と言っても、國語の促音などのやうに「急に」のではない。寧ろ、「急に」といふ感じである。(中略)廣東方言ではこのt, k の代りに屢々聲門閉鎖音を用ゐる（略）といふことであるが、さもあらうと思はれる。臺灣の發音でも聲門閉鎖に似て聞えるのは主にt, k 殊にkの場合である。(以下、略)」

これらの記述から中古入声を保存している広東方言などの閉鎖音韻尾（入声韻尾）は音節末で破裂する外破のp/t/kではなく「急に消える」ような音とみられます。そこでこれらの入声音を外破のp, t, kであらわすことには問題がある（亀井ほか　1989：895右）とみられるので、外破のp/t/k と区別するためにこれらの内破の入声をp/t/kと表記すれば、入声韻尾を保存する南方方言の入声はp/t/k→p/t/kのように変化したと考えることができるでしょう。

1. 中古音の入声について

ここでは中古舌内入声について考えることにします。『訓民正音』に「質」（舌内入声の中期朝鮮漢字）にたいして次のような記述があります（趙　2010:173）。

「「質」、「」などの韻は「ㄷ」音（[t]）を終声とすべきであるのに、世間では来母（[l]）を用いる。来母の声はゆるやかで入声にふさわしくない。（以下、略）」

　　＊「質」：質韻3等ɪĕt。「勿」：物韻3等ïuət。

そこで『訓民正音』の規定では舌内入声音を正しく表わせないとして、『東国正韻』では「質・勿のような入声の韻は影母（ㆆ）をもって来母（ㄹ）を補」（同書:182）い、ㅭ（翻字：rʔ)に正しています（注3）。

　ここで15世紀ごろの舌内入声の「質」の中国音と朝鮮漢字音を比べてみると、次のようになります（金東昭　2003：147）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 『洪武正韻譯訓』 | 『訓民正音』 | 『東国正韻』 | 『六祖』 | 日本借入漢字（B） | |
| 1455年刊 | 1446年頒布 | 1448年刊 | 1496年刊 | 呉音 | 漢音 |
| 「質」  ｔʃɪět | 지ᇹ(北方音:ciʔ) | 彆（pyət）（A） | 지ᇙ（cirʔ） | 질（cir） | シチ | シツ |
| 짇(南方音:cit) |

＊声調（傍点）は省略。

＊『洪武正韻譯訓』：「明の韻書『洪武正韻』（1375）をハングルによって注音したもの」（福井　2013：233）。

＊A：『訓民正音』（解例本）では「「彆は実際の漢字音は「별」（筆者補筆：pyər）であったと推測されるが、『訓民正音』で볃（筆者補筆：pyət）と発音すべきであるとしている（以下、略）」（趙　2010:87）。

＊『東国正韻』：「漢字音を正す作業は、人工漢字音の発音一覧である『東国正韻』という形で実を結んだ。」（同書:201）。

＊『六祖』（六祖法寶檀經諺解）：「東国正韻式漢字音を廃止して伝来の現実漢字音を採用している点で重要な資料となる。」（福井　2013：243－4）。  
＊B：藤堂　1980：171。

また中国語「質」を借入した隣接言語の舌内入声韻尾をみてみると次のようになっています。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 中国語 | 日本漢字音 | | チベット 漢字音（A） | 朝鮮漢字音 | | ベトナム 漢字音（B） |
| 「質」 | 呉音 | 漢音 | 『訓民正音』 | 『東国正韻』 |
| 右以前 | 7・8世紀頃 | 8世紀前半 | 1446年頒布 | 1448年刊 | － |
| -t | -ti | -tu | -r | -t | - rʔ | -t |

＊A：「tshir」（天地八陽神呪經にみえる「七」（質韻4等））（高田　昭和63：380）。

＊B：「cht」（越南字典（1931ハノイ）などの「質」）（三根谷　1993：476）。

また1500年頃の中国語入声にたいするハングル表記については次のような記述がみられます（小倉　昭和50：260）。

「要するに朝鮮に於て支那近代音の入聲音を諺文であらはすのにㆆㅸの二つの方法がとられたが,そのうちㆆは-k,-t,-p何れに對しても廣く用ひられ,ㅸは-k入聲中の一部（藥韻）に對してのみ用ひられて居る狀勢から察しても, 入聲音の大部分がㆆ（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/;趙　2010：18）によって代表されるものであつたことが知られる。」（注4）

1. 入声韻尾の消滅を考える

ところで前節の『洪武正韻譯訓』の「質」にみられる声門閉鎖音（/ʔ/）は現代中国語の太原方言に次のようにみられます（詹　昭和58:54)。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 中古入声韻尾による分類 | | | | | |
| 唇内入声 （-p） | | 舌内入声（-t） | | 喉内入声（-k） | |
| 鴿 | 臘 | 脱 | 割 | 各 | 托 |
| kəʔ,kaʔ | laʔ | t‘uəʔ, t‘uaʔ | kəʔ,kaʔ | kəʔ,kaʔ | t‘uəʔ, t‘uaʔ |

＊太原方言：北方方言中の西北方言山西話に属する方言。声調は略。

上のような音節末の声門閉鎖音は太原方言だけでなく、南方方言である閩方言や呉方言にも次のようにみられます（上書：258,146）。

「3）福州話（筆者注：閩方言のなかの閩東方言）の閉鎖音尾韻は, 以前は-ʔと-kの二組に分れていた可能性があるが, のちに次第に合併して行き, 今では, 大多数の福州人がすでに-ʔ 一組だけを持つようになっている。あるいは,-ʔと-kを分けているとしても,自分でも自覚できなくなっている。」

呉方言区に共通の音声特色として（ここまで筆者の補筆）「5）旧入声を保存する。旧入声字の韻尾-p,-t,-kは合併して声門閉鎖音韻尾-ʔになっている。たとえば,上海では,‘‘塌’’をt‘aʔ5, ‘‘擦’’を ts‘aʔ5, ‘‘国’’をkoʔ5と発音する。」

そこで中古入声韻尾（p/t/k）から現在の下記方言の音節末韻尾への変化を図式化すると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | | 唇内入声p | | 舌内入声t | 喉内入声k | |
| 「鴿」 | | 「割」 | 「各」 | |
| 北方方言区 | | 北京方言 | p→ʔ→φ | | t→ʔ→φ | k→ʔ→φ | |
| 太原方言 | p→ʔ | | t→ʔ | k→ʔ | |
| 南方方言区 | 閩南の 厦門方言 | 字音 | 「合」 | ap | at | 「作」 | ɔk |
| 話音 | aʔ | uaʔ | oʔ |

＊厦門方言には上のような文白異読があります（上書：250）。  
＊「鴿・合・作・各」の反切（庄司　1962: 11,11,17,12）は古沓切/古沓切/則落切/古落切で、前2者は合韻əp、後2者は鐸韻ak。

そこで「中国の北方音では入声韻尾は唐、五代に弱化し始め、十四世紀に声門閉鎖音（ʔ）になった（以下、入声弱化説は略）」（李　1975：108）とみられています。しかしこのように入声韻尾が声門閉鎖音（/ʔ/）に変化したと考えると、その声門閉鎖音（/ʔ/）はどのようにして発生したのでしょうか。  
　この疑問にたいして中古入声陌韻（pɛk）の「百」を例にして、有坂氏は次のように考えられました（有坂　昭和32:605)。

「「百」は中原音韻ではpaiʔの形であった。つまり、まづ中心母音とkとの間のglideが發展してi音となり、然る後にkがʔに變じ、その後つひに消失し去つたのである。」

そこで上の記述から有坂氏はpak→paik→paiʔ→paiのような変化を考えられたようにみえます（注5）。しかしここで本当に素朴な疑問が起こるのですが、音節末の軟口蓋閉鎖音k（/k/）は本当に声門閉鎖音（/ʔ/）に変化したのでしょうか。数ある言語学の入門書には口蓋化の法則としてk→tʃのような変化が常にみられますが、kに声門閉鎖音が内在する、あるいはk→ʔのような変化があるというような記述をみることはできません。そこで北方方言の入声「-t,-kは合流して-ʔ に弱ま」（平山　昭和42：166）り、その後入声t/kは消失した（t/k→ʔ→φ）とする考えには疑問がわいてきます。そしてこのようにt→ʔの変化に疑問が起きれば声門閉鎖音（/ʔ/）に変化するまえの「中古舌内入声はtではなかった」という考えがでてくるでしょう。

次節では中古舌内入声はtではなかったという、とても信じられないアイディアの当否を考えるために中世日本語のツの発音について考えることにします。

1. 日本語のツの発音について

キリシタン宣教師であったロドリゲスが著わした『日本大文典』（1604-8年）には当時の日本語のツの発音について、次のような記述がみられます（土井訳　昭和30：642,231、同様の記述は外山　昭和47：224－5にも）。

「日本のことばはすべて母音か子音のN,Tかに終ってゐる。」（179ｖ）。  
「ある綴字でTに終るものは,日本では‘つ’（Tçu）の綴字に当るのであって,そのTを‘「詰字」’（Tçumeji）と呼ぶ。さうしてT そのものを写す文字がないので,Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」（58丁）。

また『日葡辞書』には次のような表記がみられます（土井ほか編訳　1980：73,286,337,68,290,791,509,73,791,67）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 語中 | 語末 | |
| ッ/*ッ*表記 | *ッ*表記 | チ・ツ表記 |
| 和語 | Catta カッタ（勝つた） | － | Catçu カツ（勝つ） |
| 字音 | Futtei. フッテイ(払底)  Ippit. イッピ*ッ*(一筆)  Butji.ブ*ツ*ジ（仏事）  Gaccŏ　ガッカゥ（学校） | Xŏguatシャゥグヮ*ッ*（正月）  Qisat. キサ*ッ*(貴札)　書状。 | Xŏguachiシャゥグヮチ（正月）  Butçuji.ブツジ（仏事） |

＊ツ：字形の起源は「古代朝鮮半島における用字を参考にした「州」の説が有力である。」(日本大辞典刊行会編　昭和50: 第13巻606)。ただし、「*ッ*」（斜体）は土井氏の表記の代用字。（注6）

1. 謡曲におけるツの発音について

前表にみえるButçujiとButji（仏事）の違いについては、次のような考えがあります（上書：854）。

「Itonami,u（営み,む）の条にButçujiよりもButjiの方がまさるとしているから,規範的には入声形を正しいとしながらも,話し言葉では開音節化の傾向が次第に進んでいたものらしい。」（注7）

上の記述から当時の舌内入声tは開音節化の傾向が進み、その後現在のツ（tsu）にかわったと考えられます。

では江戸時代中頃の舌内入声音はどのように発音されていたのでしょうか。そこで古い発音を伝えているといわれる三浦の『音曲玉淵集』（1727年）の記述を次にみてみることにします（岩淵　昭和52：119）。

「惣してツの音の字は一字にても二字にてもつめて唱へ或はのみてうつり又はちト唱へ替とかく直には唱へず（巻一）

とあり、歌書並びに呉音はこの入声のツを「ち」と唱えるのが定格としている。」

＊『音曲玉淵集』：「謡の発音について記述したものとしては最も詳細であって、類書中群を抜いた存在というべく後世謡の発音を説いたもの」（上書：100）。

ここで『音曲玉淵集』と先の『日葡辞書』の「ツ」にたいする表記を比べてみると、次のようになります。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 『日葡辞書』（1603年） | -tt-（語中）・-t（語末） | chi/tçu |
| 『音曲玉淵集』（1727年） | ツメル/ノム | チ（直にツとは唱えず） |

上の比較から『日葡辞書』の-tt-（語中）表記は『音曲玉淵集』のツメルに相当し現在の促音とみられそうです。また『日葡辞書』の語末のtやButji（仏事）のtは『音曲玉淵集』のノムに対応するようにみえます。ところで『音曲玉淵集』は『日葡辞書』よりものちに刊行されていますが、謡は師匠口伝でその発音を忠実に守ろうとしていることから当時の口語を記録した『日葡辞書』よりも古い発音をとどめている可能性があるでしょう。

そこで現在の謡曲にみられるノムの発音を次にみてみることにします（上書：150,150,151）。

1.「この場合の音を[t]とし、その調音法については、（改行）之は先づ舌尖と歯茎の上との閉鎖をして、その閉鎖を破らないで、[u]を出さうと企てて息を鼻に通す。完全な[u]でないことは勿論であるが、確かに[u]性のものである。」  
　＊石黒魯平　『音声の研究』（第1輯　昭和2年9月：未見）。

2.「この音を[]で表わし、（改行）口を全く閉ぢて完全に鼻音になる、丁度鼻がこそばゆくてクンクン云ふ時の様に、………露骨な生の破裂音を嫌つたものらしい。」  
　＊佐伯功介　『音声の研究』（第1輯　昭和2年9月：未見）。

3.「舌を上に着けて密閉を作り、唇も同時に軽く閉ぢ、咽頭に於て鼻腔への密閉、破裂を起すものである。………謡では舌を上に着け唇も閉ぢて此音を発するけれど、舌先に密閉がなくとも、口をあんぐり開けても、のどひこの密閉だけで、これと同音と認めるべき発音が出来る。して見ると舌先の位置は此音の本質に関係のない色附け的変化と見るが至当である。」  
　＊佐伯功介　『音声の研究』（第2輯　昭和3年？：未見）。  
　＊上の音を佐伯氏は「[]か[kn]が最もよい」（上書：188）とされました。

また『吉利支丹教義の研究』のなかに入声ツの発音に関して次のような記述がみられます（橋本進吉　昭和36：262）。

「謠曲に於ては、かやうな音變化（筆者注:連声）がある外に、猶、濁音及鼻音の前で入聲のツが鼻的破裂音（Faukallaut.即、軟口蓋を上げて咽頭壁に密着せしめて閉鎖を作り、之を破つて氣息を鼻腔へ出す時發する音）になる事がある。」

この入声のツにたいするノム・ツメルなどの用語の違いを次にみてみます（岩淵　昭和52：131－2,152,160,178、187－8,209,355）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 『謡開合仮名遣』  （B） | 『音曲玉淵集』  （C） | 『唱曲弁疑』  （D） | 『謳曲英華抄』  　　（E） | 『観世流謡曲全集』  （上・下巻） |
| 1697年大坂刊 | 1727年江戸刊 | 1768年大坂刊 | 1771年大坂刊 | 昭和3・4年刊 |
| t | － | ツム | ツムル | 詰 | ツメル |
| （A） | 鼻へ入る | ノム | ノム | 呑 | 含む |
| ra行へ | 舌をまく | 舌を巻きて唱ふ | － | ツメル, 含む |

＊A：橋本氏は『国語音声史の研究』（昭和2年度の講義：未見）で、先の「この音（筆者注：鼻的破裂音）を記号で表わせば[]とでもすべきものであると言われた。」（上書：187－8）そうです（注8）。

＊B：『当流謡百番仮名遣開合』（池上幽雪著）に同じ。同書：214。

＊C：三浦（時中翁）著。同書：209。

＊D: 田思明著（寺田思明。版元の寺田善助とみられます）。同書：100,119（注9）。

＊E：二松軒述。「入声なれ共つの字不詰不呑出して唱ふ」として、「詞寒雨の」の例をあげている。「此呑といふは舌を齶に当息を鼻へ抜く也」（同書：354-5,355）（注10）。

＊浄瑠璃の伝書『都のにしき』（1737年）にも「のむかな　新 月 の いろ念仏申かずかず　つをはなへのむ」（同書：189－203ほか）とあり。

ところでノムは現在の謡曲では「含」ともいわれ、『観世流謡曲全集』では「含む」と「ツメル」との違いは大略次のようになっています。（上書：206）。

「謡い方の上で続けて発音される所では、入声ツとその次に来る音との連り方が言葉として密接な場合には、次の音が無声子音（ヤ行ワ行の子音を除く）である時は「ツメル」となり、母音及び有声子音である時は「含」となり、連り方が密接でない場合には、無声子音である時にも「含」となる傾向が見えると言えよう。同時に次の音がア行とワ行音である場合には、連声となる事もあると言えよう。ただしラ行音では「ツメル」と「含」とがある。」

＊観世流改訂本刊行会発行（上巻昭和3年、下巻昭和4年刊）。

　＊連声：「「　　　ツメル」（源氏供養）」（上書：192）。

ここまでみてきたように謡曲の入声ツは「例外はあるが、極めての大体論としては、普通の言葉で促音に発音される所はやはり促音で発音され、普通の言葉でツ[tsu]と発音される所は、 []で発音されると言う事が出来よう。」（同書：107）。

1. 平曲・御文や声明のノムの発音について

前節では江戸時代と現在の謡曲におけるノムの発音についてみてきましたが、それ以前の室町時代初期に書かれた世阿弥自筆かと言われる伝書『花習内抜書』（1418年）や自筆の謡本『松浦の能』（1427年）には次のような小書きされた「ッ」表記がみられます（上書：60,219）。

「ホンゼッタヽシクテ（本説正しくて）

ケック（結句）  
コノジセッノノウ（この時節の能）」（以上、『花習内抜書』）

「ジセッモハヤク・・・」（時節も早く・・・）

ゼンザイゲタップク・・・（善哉解脱服・・・）

ハヤハヤブックワヲエ給ヘシ（ハヤハヤ仏果を得給ふべし）」（以上、『松浦の能』）

　　　＊（　）内の解釈は岩淵氏のもの。

上の『松浦の能』にみえる第1・2例の小書きの「ッ」は「促音に発音されたとは考えられない。しかりとすれば、普通のツという仮名とは発音が異る入声ツを区別して示すためにツを小書したのではないかと考えても不自然ではあるまい。（略）」（同書：220）として、岩淵氏は小書きの「ッ」にたいして次のような考えをだされています（同書：222）。

「（上略）[]式の発音は江戸時代に入って後に生じたものではなくして、世阿弥時代からすでに存したものと言えるようである。しかして謡本ではない『花習内抜書』のごときものにも入声ツが特別に取扱われている点から言えば、それは謡の謡い方においてのみ行われたのではなくして当時の普通の言葉でもそうだったのではないかと考えられる。」

このように世阿弥の伝書などにも小書きの「ツ」がみられることから鎌倉・室町時代の普通の言葉にも入声ツの音としてノムの発音があったとみることができるでしょう。

またこのようなノムの発音は謡曲だけでなく平曲や蓮如上人の御文、また声明にも次のようにみられます（上書：226,233,133,134,232－3）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | A | B |  | C | D |
| 『平家正節』 | 『御文当用読法修正』 | 『花習内抜書』 | 『和字正濫通妨抄』 | 『声明類聚』 |
| 鎌倉時代 | － | 1418年奥書 | 1697年成 | － |
| t | ツメ（促音） | 促音にはツ | 小文字のツ | 鼻に入れていふ | 促音 |
|  | 鼻的破裂音 | 鼻的破裂音はム | 入（鼻的破裂音） |
| ラ行 | -rr- | 促音 | 舌を内へ巻き返す | － |

＊上表には和語の「チ（ツ）」と連声の場合はのぞく。

＊A：平曲は前田流の語り本（『平家正節』青洲文庫旧蔵）を主たる材料としたもののまとめ。波多野流の語り本では「入声ツの所には常にツメとあって、ノム等と記したものはない。」（上書：231）となっているようです。。

＊B：連如上人の御文（1400年代後半：注11）のかわりとして『御文当用読法修正』（立花慧明編　大正4年）の記述（「鼻的破裂音の場合は、その漢字の左肩にムを記し、促音にはツを用いている。」（同書：233））にかえました。

＊C：契沖著。「（略）鼻に入れていふ。さらねは屈は沓のことく聞ゆるやうに、葛は勝、吉はと聞ゆるやうにいふ。（注12）」（同書：134）。

＊D:『南山進流声明類聚　付加陁』（宮野宥智編　昭和5年刊　未見）のまとめ（同書：232－3）（注13）。

そこで平曲や御文・声明と謡曲における入声ツにたいする取扱いは概略、次のようにいえるでしょう（上書：235）。

「入声ツとその次続音との関係が、極めて密接である場合は、四者（筆者注：声明、平曲、謡曲、御文）ともにその取扱い方が大略同じだが、それが密接でない場合は、声明が促音で発音される傾向が最も強く、御文が鼻的破裂音で発音される傾向が最も強い。しかして、平曲・謡曲はその中間に位し、中でも、平曲は声明に近く、謡曲は御文に近い。（以下略）」

（注14）

そこでこのノムの発音を知るために鎌倉時代以前の入声韻尾p/t/kにたいする表記を次にみてみます（上書：240－1）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  | 『漢書楊雄伝』 | 『法華義疏』 | 『金光明最勝王経音義』 | |
| 奈良初期ころ | 天歴2年  （948年）加点 | 長保4年  （1002年）加点。 | 承歴3年（1079年）加点。 | |
| 万葉仮名表記 | 同音字表記 |
| p | フ | フ | フ | 1例（臘良布反） | 10例 |
| t | チ（A） | ム（B） | 撥音を表わす符号と同じ | なし | 26例 |
| k | ク | キ又はク | ク | 久6例・伎1例 | 45例 |

＊A：上代では「普通の漢字音としては、p・k・tと言った音尾を全く捨て去るか、又はこれに各種の母音を添えて発音するかしたもののように想像されます。」（上書：240）。たとえば舌内入声「質」の呉音は「シチ」、漢音は「シツ」（藤堂　1980：171）。

＊B：「この本では撥音はm nの区別なく共に一様にムで表わしてありますから、結局、撥音も入声のtも同一の文字で表記されて居るわけであります。」（岩淵　昭和52：240）。

上表からわかるように『金光明最勝王経音義』の入声kはキ・ク、またpはフと万葉仮名で表記されていますが、舌内入声韻尾tにたいしては同音字表記のみがみられます（注15）。そこで当時の「入声tの発音は現在のごとくツの仮名の音で発音されたのではなく、中国語の原音に近い発音であったので、その結果その音を正しく表わすような仮名がなく、ためにかかる特殊の方法によって表記するに至ったものと解せられ」（上書：132）ています。また悉曇学者明覚があらわした『反音作法』（1093年作、1095年写）に「「終ニフツクチキ有ヲ云レ入ト。」とあるので、この頃には入声の表記法もほぼ現在のように一定して来た（注16）のではないかと思われます。」（同書：241）。

そこで平安時代以後から現在までの舌内入声にたいする表記を簡単にまとめてみると次のようになります（同書：241－2）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | | A | B | C | D |
| 漢書楊雄伝 | 法華義疏 | 『金光明〜』 | 『無明抄』 | 『花習内抜書』 | 『日葡辞書』 | 現在 |
| 948年加点 | 1002年加点 | 1079年 | 1211-6年頃 | 1418年奥書 | 1603年 |
| 常にム | 撥音と同一 | 同音字表記 | みなすてて | 小書きのッ | chi/tçu・t | ツ/ッ |

＊A：鴨長明による鎌倉時代の歌論書。「はねたる文字、入声の文字の、かきにくきなどをば、みなすててかくなり。（以下、略）（注17）」（上書：149）。

＊B：『花習内抜書』についての簡単な解説は表・竹本　1988：71－2。

＊C：「Xŏguat/Xŏguachi」（「正月」）, 「Butji/ Butçuji」（「仏事」）（土井ほか編訳　1980：68,67,791,791）。  
＊D：促音は小書きのツ。

1. 『捷解新語』の入声表記を考える

前節では舌内入声が現代までどのように表記されてきたのかをみました。では橋本氏が鼻的破裂音とされた音（注18）はどのように発音されたのでしょうか。その発音を知るための鍵が『捷解新語』（康遇聖著　1618年成）の注音法にあります。

そこで『捷解新語』とほぼ同時代の『日葡辞書』の表記を次にみてみます（京大国語国文研究室編　昭和47：276/282,71,221/295,356/361/371,349、土井ほか編訳1980：623,462,479,337/601,285）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 語頭 | 語中 | 語末 | |
| 『捷解新語』 （A） | 쭈가와시라루 ccukawasiraru （つ加わしらる）/ 주가와시라룽 cukawasiraru’ka （つ加わしらる加） | 닏기 nitki（につき；日記）, 겯구 kyətku （けつく；結句）/ 격구kyəkku （けつく；結句） | 읻빋Itpit（いつひつ；一筆）/ ᅁᅩ뎐비쭈 ’ŋkotyənpiccu（御てんひつ；御伝筆）/ 다빋주ta-pit-cu（たひつ； 多筆）　＊‘-’は補筆 | 후다쭈 hutaccu （ふたつ ；二つ） |
| 『日葡辞書』 | Tçucauaxi（遣はし） | Nicqi（日記）, Qeccu（結句） | Ippit（一筆）/ Tafit（他筆） | Futatçu （二つ） |

＊『捷解新語』：「十巻よりなる朝鮮人のための日本語教材」で、「その述作後、半世紀を経て康煕十五年（筆者注：1676年）にはじめて上梓された。」（亀井　昭和59：314,314）。

A：亀井氏の表記（亀井　昭和59:360/360,363,362/362,358/358/358,359）は上書から引用しなおしました。

上表からわかるように『日葡辞書』ではQeccu（結句）やIppit（一筆）には現在のローマ字綴りkekkuやippitsuと同じように後続音節の子音を重ねる表記がみられ促音を表わしているとみられそうです。それにたいして音節の区切りを‘－’で示すと、『捷解新語』ではkyət-ku（「結」：屑韻4等iet）の表記で入声韻尾のtを、またkyək-kuの表記では「ケ」と「ク」のあいだの促音性を表記しようとしたとみられそうです。  
　ところでこの『捷解新語』の初声を重ねる表記については、亀井氏に次のような記述がみられます(亀井　昭和 59:358－9）。

「「쭈」（ccu）を以てした例は全巻に亙ってみえる。（中略）주（cu）が「つ」の注音字母として一般に用ゐられてゐることは言ふまでもないが、「쭈」なるハングルも「むしつけ――무시쭈계（musiccukyəi）（無躾）」（七ノ三ウ、九ノ三ウ）その他の例において、本来の国語語彙に対する注音に用ゐられてゐる。」　＊翻字は筆者。

このように『捷解新語』には『日葡辞書』にみられないccukawasiraru（語頭）やhutaccu（語末）のような初声を重ねる表記がみられます。では康遇聖はこれらの表記でどのような音をあらわそうとしたのでしょうか。

そこで『捷解新語』と同時代の『かたこと』（京の俳人安原貞室著　1650年刊）の表記を比べてみると、次のようになっています (京大国語国文研究室編　昭和47：265,11,164,284,30,61,11、白木　昭和51：50,33,-,45,46,-,-）。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 例語 | いつ | こち | そち | あち | どこ | 天気 | こそ |
| 『捷解新語』 | 이쭈 | 고찌 | 소찌 | 아찌 | ᄕᅩ고 | 뎬끼 | 고쪼 |
| 翻字 | ’iccu | kocci | socci | ’acci | ntoko | tyəinkki | kosso |
| 『かたこと』 | いつつも | こち | － | あつちこち | どつこ | － | － |

＊翻字は筆者。  
＊『捷解新語』(亀井　昭和59: 360,360,360,360,347,365,364)と『片言』（亀井　昭和59:360）の表記は上書から引用しなおしました。

上にみられるように『捷解新語』では「これら（筆者注：「こち」「そち」「あち」）の「ち」は「찌」（cci：翻字は筆者）専用であって、そのうち「こち」の例は三十数例の多きを数へ」(亀井　昭和59:360）、また『かたこと』に「あちこちといふべきを　〇あつちこちなどつめていふはあしかるべし（略）」(亀井　昭和59:360、白木　昭和51：45)の注記がみられることから、亀井氏は初声を重ねる「「쭈」なる形は促音を写したものかと思はれる。」(亀井　昭和59:360）とみられました。  
　そこで『捷解新語』の初声を重ねる表記と『バレト写本』の重ね子音字の表記（参考までに『日葡辞書』・『日本大文典』）を次にみてみることにします。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 例 | 『捷解新語』（A） | | 『バレト写本』（B） | 『日葡辞書』 | 『日本大文典』 |
| 1618年ころ成る | | 1591年 | 1603年 | 1604-8年 |
| 重ねて | 가사녀뎨 | kasanyətyəi | cassanete | Casanete | Casanete |
| 翼 | － | － | ccubassa | Tçubasa | － |
| 確かに | 다시까니 | tasikkani | taxxicani | Taxicani | Taxicani |
| 与へ | － | － | attaye | Ataye | ataye |
| 上天 | － | － | jotten | Iŏten | Iŏten |
| こそ | 고쏘 | kosso | cosso | Coso | coso |
| 天気 | 뎬끼 | tyəinkki | － | Tenqi | Tenqui |
| 催促 | 사이쏘구 | sa’issoku | － | Saisocu | saisocu |
| ばかり | 바까리 | pakkari | － | Bacari | bacari |
| 都 | 미야꼬 | miyakko | － | Miaco,Miyaco | Miaco,Miyaco |

＊引用書：  
『捷解新語』：京大国語国文研究室編　昭和47：40,-,43,-,-,11,61,114,115,172。  
『バレト写本』：福島　1990新装版：311。  
『日葡辞書』：土井ほか編訳　1980：104,621,619,36,369,151,646,551,46,400/413。  
『日本大文典』：土井訳　昭和30：415,-,419,188,513,80,384,83,67,338/287。  
A：『捷解新語』（亀井　昭和 59:－,－,366,－.－,364,365,365,364,365）の表記は上書から引用しなおしました。  
B：宣教師Manoel Barretoの写本のローマ字綴りについては『吉利支丹文献考』（土井忠生著　昭和38年）に記述がありますが、未読のため今回は引用を控えました。

上表にみえる『捷解新語』の「고쏘」（kosso）は「数十に及ぶ実例の悉くが例外なく右（筆者注：上）のごとき注音法を以て記されてゐ」（亀井　昭和59：364）ます。  
　この「고쏘」（kosso）の初声を重ねる表記について次のような考えがあります（福島　1990新装版：313－4）。

「特に係助詞「こそ」の「そ」がバレトの写本と『捷解新語』との双方において重ね子音であらわされていることは、偶然の一致とは考えられないのである。「こそ」は係り結びをなしていて文を強めるのである。したがってこの「こそ」は、文中にあって「コッソ」のように強調して発音されたものであろう。日本語の話しことばにはしばしばあらわれるものである。そういうの日本語を、日本語の上手な宣教師たちが聞き取ってcossoと写したり、十年も日本に捕虜になっており、日本語のよくできた康遇聖が고쏘と写したものであろう。」

またこのような重ね子音字表記は『バレト写本』と『捷解新語』以外にもキリシタン関係の諸本に少数ながら次のようにみられます（土井ほか編訳　1980：853）。

『日葡辞書』：「Issuca（鶍）」、「Misso（味噌）」（葡語文中に）

『羅葡日辞書Diluculò』：「asa toccu（朝疾ク）」

『日本大文典』：「Ittçugoro（何時頃）」

イエズス会士の書翰や報告書など：「cassa（笠）,Fottoque（仏）」

＊「Issuca.原注1）イスカ（鶍）」（土井ほか編訳　1980:343）、「Itçutçuno coro（何時の頃）」（土井訳　昭和30:400）。

このようにキリシタン関係の色々な諸本のなかに重ね子音字表記がみられることからそれらの表記が促音や強調をあらわしているとみることは難しいでしょう。そこで重ね子音字表記は誤写や聞き間違いによる誤表記でもなく、また当時の促音や強調をあらわすための表記でもない、何か特殊な生の日本語の音をあらわそうとしたのではないかという考えがでてくるでしょう。

そこで重ね子音字表記は何か特殊な音をあらわしているのではないかという推測を確かめるために、亀井氏の「有って」にたいする2種の表記についての記述（注19）をまとめると、次のようになります（京大国語国文研究室編　昭和47：255,143）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 仮名表記--ハングル表記 | 本文表記 | ㄷ/ㄸが表記された場所 |
| 初声を重ねた表記 | あて-----아뗴（’a-ttyəi） | 「つ」なし | 第二音節のはじめにㄸ |
| 単書表記 | あつて---앋뎨（’at-tyəi） | 「つ」あり | 第一音節末と第二音節頭にㄷ |

＊翻字は筆者。  
＊ハングル表記（亀井　昭和 59:364）は上書から引用しなおしました。

そこで「有って」にたいする初声を重ねた表記と単書表記との違いから亀井氏はその違いを次のように考えられました(亀井　昭和 59：364)。

「かながきが一定の方針の下に行はれてゐるとすれば、「つ」の有無は発音と関係し、従って促音をあらはすのはその一方のみとなる。（中略）本文に促音を「つ」で明記してゐて、ハングルの方に初声を重ねる形式をとったものはないのである。」

このような単書表記と初声を重ねる表記の違いからハングルの単書表記はのちに促音となる音を、またこの節の初めに紹介した「hutaccu（ふたつ）」などの初声を重ねる表記はその後現在の「つ」（tsu）となる音を表記したとみられそうです。

では初声を重ねる表記で康遇聖はどのような音をあらわそうとしたのでしょうか。亀井氏は『捷解新語』のハングル文の比較（注20）から康遇聖が初声を重ねる表記で表わそうとした音を、次のように考えられました（上書:367)。

（注20の文章につづき）「これを以てみると、初声を重ねる形はいはゆる勁音（된시옷（筆者注：toin si ’os）と同じく声門の破裂（glottal explosive）の音をあらはすものかと思はれる（注21）。（中略）要するに初声を重ねた注音法に対し促音より適切と思はれるものを擬することはやはり不可能である。しかし、促音を以てすべての場合を押切ってしまふこともまた躊躇せられる。（以下、略）」

1. 『捷解新語』の初声を重ねる注音法とは

前節で初声を重ねる表記で康遇聖は濃音（声門閉鎖音/ʔ/）をあらわそうとしたと亀井氏がみておられたことを紹介しましたが、その濃音は次のような音とみられています（福井　2013：23）。

「韓国語の特徴である濃音を発音するときに口腔の閉鎖の解放に先立って声門の閉鎖が観察でき，ゆえに濃音を[ʔk, ʔt, ʔp」と音声表記することが可能である（以下、略）」

＊前回の更新（2017.1．15　 <http://ichhan.sakura.ne.jp>）

「郷歌の末音添記「叱」「尸」「音」について考える」[の「第5節](http://ichhan.sakura.ne.jpの「第5節)　声門閉鎖音（/ʔ/）について考える」を参照ください。

ところで前回の更新のなかで奄美喜界島方言と現代の濃音のカイモグラフが同じ（伊波　1974：27、小倉　昭和50：174）であることから、喜界島方言の喉頭化音と現在の濃音が同じ性質のものであるとみられることを述べておきました。そこで『捷解新語』の初声を重ねた쭈（ccu：翻字は筆者、以下も）を濃音の ʔcu、また中世日本語のツを喉頭化音のtʔsuであったとみることができるでしょう。そして同じように他の閉鎖音にもこの考えを適用して初声を重ねた表記CCVを喉頭化音のCʔVとみると、「とかく」の表記「도가꾸」（toka-kku）/「도각구」（tokak-ku）/「도가구」（tokaku）（亀井　昭和 59:366)からそれらの音をtokakʔu（喉頭化音のク）/tokaQku（促音の後のク）/tokaku（現在のク）のように考えることができ、当時の日本語のクの音がゆれていたとみることができるでしょう。また入声ツの変化をtʔsu（쭈：ccu）→tsu（주：cu）と考えると、中世日本語の「入声音の特殊な注音法「쭈」は、やはり、tから今日行はれる単純な「ツ」に推移するその過程に存した実際の発音の様態を写し伝へてゐるもの」（同書:362）との亀井氏の言葉も承認できるでしょう。

＊以前の更新（「４．琉球方言にみられる無気喉頭化音について」<http://ichhan.sakura.ne.jp/kaline/kaline2.html>）を参照ください。

ここまでの考えをもとに「遣はしらる」「結句」「ふたつ」にたいする康遇聖の表記と彼が聞きなしたとみられる音、そして当時の日本語の音を次のように推定することができるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 語頭 | 語中 | 語末 |
| 語例 | 遣はしらる | 結句 | ふたつ |
| 康遇聖の表記 | ccukawasiraru | kyət-ku/kyək-ku | hutaccu |
| 康遇聖が聞きなした音 | ʔtsukawasiraru（濃音） | keQku（促音） | hutaʔtsu |
| 当時の音 | tsʔukawasiraru（喉頭化音） | keQku（促音） | hutatsʔu |

　＊音節間に－印を補筆。

また同じように「こそ」と「有って」にたいするバレトと康遇聖両者の表記から両人が聞きなした音と当時の音を次のように推定することができるでしょう。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 『バレト写本』 | 『捷解新語』 | | |
| 両者の表記 | cosso | kosso | あて ’a-ttyəi | あつて　’at-tyəi |
| 両者が聞きなした音 | koQso（促音） | koʔso（濃音） | aʔte（濃音） | aQte（促音） |
| 当時の音 | kosʔo（喉頭化音） | | atʔe（喉頭化音） | aQte（促音） |

このように重ね子音字表記cossoや初声を重ねる表記kossoを強調された促音の「コッソ」（koQso）ではなく、喉頭化音のkosʔoとみれば初声を重ねる表記にたいして「促音を以てすべての場合を押切ってしまふこともまた躊躇せられる」（同書:367)とされた亀井氏の疑問も解くことができるでしょう。

ところで「確かに」にたいするバレト写本の重ね子音字表記「taxxicani」（福島　1990新装版：311）と『捷解新語』の初声を重ねる表記「다시까니」（tasikkani：翻字は筆者）（京大国語国文研究室編　昭和47：43）の食い違いにたいして、次のような疑問ががだされています（福島　1990新装版:314）。

「「確かに」についてみると、キリシタンの写本ではその発音は「タッシカニ」のようになるが、『捷解新語』では「タシッカニ」のようになり、「シ」を強調したり「カ」を強調したりして一致していない（略）」

これは『バレト写本』のtaxxicaniと『捷解新語』の다시까니（tasikkani）をそれぞれtaQʃikaniとtaʃiQkaniのように促音（強調）とみたために「タッシカニ」と「タシッカニ」のような食い違いがなぜ起きるのかという疑問になったといえるでしょう。しかし『捷解新語』の初声を重ねる表記は当時の日本語に存在した喉頭化音（CʔV）をあらわしていたと考えると、当時の日本語の「確かに」（taʃʔikani）の音をバレトはtaQʃikani、康遇聖はtasiʔkaniと聞きなしたためにtaxxicaniと다시까니（tasikkani）の表記の違いとしてあらわれたということができるでしょう（注22）。

この考えがよく理解できるように表にすると、次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 『バレト写本』 | 『捷解新語』 | 『日葡辞書』 |
| 両者の表記 | cosso | kosso | koso |
| 両者が聞きなした音 | koQso | koʔso | koso |
| 当時の音 | kosʔo（こそ） | | |
| 両者の表記 | taxxicani | tasikkani | Taxicani |
| 両者が聞きなした音 | taQʃikani | tasiʔkani | taʃikani |
| 当時の音 | taʃʔikani（確かに） | | |

このように当時の日本語に喉頭化音（CʔV）が存在していたとみれば「確かに」の表記の違いにたいする先の福島氏の疑問にうまく答えることができるでしょう。

1. 中古舌内入声はtではない

ここで再び舌内入声を考えることにします。中期朝鮮語の舌内入声韻尾はtやrではなく、『東国正韻』ではㅭ（rʔ）に正されています。そこでもし中古舌内入声をtと考えるなら、そのtが朝鮮語内で独自の変化を起こしてrʔになったと考えなければなりません。しかしそのt→rʔの変化が起こった理由を説明することは難しいでしょう。また中古以後の入声韻尾「-t,-kは合流して-ʔ に弱ま」（平山　昭和42：166）ったとする通説には第４節でみたように問題があります。そこで朝鮮借用漢字の舌内入声韻尾がt→rʔと変化していること、また中国語中古入声韻尾の変化（t→ʔ →φ）をより自然な変化として説明するために、中古舌内入声韻尾がtであったとする通説を破棄することにします。そしてそのかわりに中国語・朝鮮語・日本語学者の誰一人として想像だにしなかった中国語の上古舌内入声をT、そしてT（上古）→tʔ（中古）のような変化を考えることにします。すると中国語の中古音以後の変化をtʔ→ʔ（入声韻尾の消失）→φ（声門閉鎖音の消失）、また中期朝鮮語はtʔ→rʔのような変化を想定でき、通説に比べてよりよい説明ができることでしょう。

上の上古舌内入声をT、中古舌内入声をtʔと考える新説とこれまでの通説の違いは、次のようになるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | | 新説 | 通説 |
| 中国語 | 北方方言 | T→tʔ→ʔ→φ | t→ʔ→φ |
| 南方方言 | T→tʔ→t/ʔ | t→t/ʔ |
| 中期朝鮮語 | 『東国正韻』 | （T→）tʔ→rʔ | t→rʔ |
| 日本語 | 呉音 | T→tʃi | t→tʃi |
| 漢音 | T→tʔ→tsu | t→tsu |
| 舌内入声のツ | T→tʔ→tʔsu→tsu | t→tsu |

＊φ: 消失。t：外破音（/t/）。t：内破音（/t/）。T:上古舌内入声。tʔ:中古舌内入声。ʔ：声門閉鎖音（/ʔ/）。

また中世日本語の入声ツを喉頭化音のツ（tʔsu）とみれば、借用漢字の入声の変化はT（奈良時代以前）→tʔ（平安時代頃のツ）→tʔsu（쭈）/t（ㄷ:促音と連声；1600年ころ）→tsu/Q（주/促音；現在）のようにうまく説明できるでしょう。

このように中古舌内入声をtʔとするアイディアは中国語や朝鮮語だけでなく、日本語のいままで未解決であった問題を解くことができるでしょう。しかしこのとっぴな考えには解決すべき問題（注23）が多くあります。

では日本語の舌内入声の変化（T→tʔ→tʔsu→tsu）を満たす上古舌内入声Tとはどんな音だったのでしょうか。次回の更新ではその謎を解くための鍵となる撥音について考えることにします。

【注】

1. 上古舌内入声韻尾がtであるという考えは下表からみることができます。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 時代 | 先秦 | 西漢 | 東漢 | 南北朝 | 隋唐 | 五代 | 宋 | 元 | 明清 | 現代 |
| 韻母 | et | et | et | eɑt | at | at | eat | a | a | a |

＊例は「第十章　歴代語音発展総表（二）韵部（17）質部 開二（八）」（王力　1985：512）。

1. 入派三声：「元の泰定元年（一三二四）原注（1）、民間の戯曲の用韻法（曲韻）を示すべく、周徳清によって編まれた『中原音韻』二巻」の著者は「「起例」で次のように述べる。（改行）平上去入の四声の内、『中原音韻』に入声はなく、平上去の三声に分配してある。（以下、略）」（大島　1998増訂版：229,234）ことをいう。
2. 『訓民正音』に五音の緩急について、「（牙音から歯音までは略）喉音のㅇとㆆについて、その緩急（筆者注：ㅇが緩、ㆆが急）が互いに対になっている」（趙　2010:84）という記述がみられます。そして「中国中古音（隋・唐時代の音）の入声の韻尾[-t]が朝鮮漢字音では「ㄹ」（[-l]）として現れる。」（趙　2010:87）ことから入声の「質」（俗音）は緩なる音質をもつ질(cir)では表わすことができないと考え、急なるㆆ（声門閉鎖音/ʔ/）を補って지ᇙ（cirʔ）と『東国正韻』で規定（「‘이영보래（以影補来）’」（金東昭　2003：147））されたとみられます。
3. 『四聲通攷』凡例中の一節：「故俗音終聲於諸韻用喉音全清ㆆ, 藥韻用唇輕全清ㅸ以別之」  
   『四聲通解』凡例中の一節：「唯藥韻則其呼似乎效韻之音,故蒙韻加ㅱ爲字,通攷加ㅸ爲字,今亦從通攷加ㅸ爲字」  
   　＊ともに小倉　昭和50：26,26。各字の〇印のルビは省略。
4. 北京官話「百・包・博」の変化にたいして有坂氏は次のように考えられた（有坂　昭和32：605）と思われます。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 中古音 | 中原音 | 北京官話（拼音） | 福州音（A） | 朝鮮漢字音（B） |
| 「百」 | pʌk→paik------→ | paiʔ------→ | pai（băi） | paik陰入声 | pʌik |
| 「包」 | pɑk→pɑuk→pɑuʔ→ | pɑu-------→ | pɑu（bāo） | pau陰平声 | phoL/H |
| 「博」 | pɑk→pɑuk------→ | pɑuʔ(→poʔ)→ | po（bó） | pɔuk陰入声 | pak |

＊「中原音韻に於ては、肅豪韻の平聲陰の下に包・胞・苞を出して「巴毛切」とし、更に同じ韻の入聲作平聲の下に薄・箔・泊・博を出してやはり「巴毛切」としてゐる。」（同書：606）。  
＊「百」：陌韻（pɛk）。「包」：肴韻（pău）。「博」：鐸韻（pak）（藤堂・小林　昭和46：90,74,86など）。

A：王天昌　民国58：156,153,146。  
B:伊藤　平成19：214,161,200。

また北方方言の閉鎖音韻尾の消失変化については次のような考えがなされていると橋本氏は書かれています（橋本萬太郎　1981：327）。

「CVp＞CV（改行）CVt＞CV（方言によってはCVi）（改行）CVc＞CVi（改行）CVk＞CVu（改行）のように「変化」し、（略）この「変化」を説明するために、唐末から、音節末の閉鎖音が「弱まった」として、たとえば

CVp＞CVp＞CV

のように、このpをちいさく書いて、その消失の中間段階をしめしたり、

CVp┓  
CVt┻━CVt━┓

CVk ＞ CVk━┻CVʔ＞CV

のような、併合のあとをたどって、その「説明」にしようとしている。（以下、略）」  
＊筆者注：p：内破のp。C：子音。V：母音。ʔ：声門閉鎖音。 } の記号は┓と┻で代用。＊実は「月」の各方言 [tsuki]（長崎方言）/[tsuk]（五島富江町山下方言）/[tsuT]（鹿児島方言：促音T）（中本　1976:154,155,158）からki→ki（iはiの無声化音、iの下部に小丸記号の代用）→k→ʔ（声門閉鎖音）→φ（消失）の変化を考えたことがあります。  
＊「１７．促音便ってなに？」（2003.12.01　更新）　http://ichhan.sakura.ne.jp/rendaku/rendaku11.html#sokuonbin

1. 「〔注意〕促音に用いる「つ」は,なるべく小書きにする。」(文化庁編　平成13増補2版：20)。  
   ＊「（2）現代仮名遣い(昭和61.7.1)　 内閣告示・内閣訓令の本文の4　促音の項」。上の〔注意〕によると小書きの「つ」は推奨されていますが、強制ではないようです。
2. 『キリシタン教義の研究』には次のような記述がみられます（橋本進吉　昭和36：261-2）。  
   「漢字音の入聲のツはt音で表はされて居る。  
   　　taixet（大切）　guedat（解脱）　jixet（時節）（以下、10例略）  
   　かやうに、入聲のツをtと書いて、普通のツ（tçu）と區別したのは、發音に相違があつたので、やはり文字通りtと發音したのであらう。（以下、略）」  
   　また次の比較から「鼻音の後の語末では[d]は[b]や[g]よりも変化に対する抵抗力が強い」（下例とともに　M.シュービゲル　1982新版：76）とみられます。  
   　「ド. Land[lant] 　　　　　　　　　　エ. land[lænd]<土地>  
   　　　 Lang[laŋ] 　　　　　　　　　　　　 long[lɒŋ]<長い>  
   　　　　Lamm[lam] （中高ド．lamb）　　　 lamb[læm]<子羊>」  
   　そこで唇内入声（p）や喉内入声（k）がより早く開音節化し、舌内入声（t）は遅く中世まで保存されたと考えることができるでしょう。
3. 鼻的破裂音「を示すものとしては「鼻へ入る」という言葉の方が、「ノム」「含」等の言葉より一層如実に、その発音の実体を言い表わしているのではなかろうか。」（岩淵　昭和52：219）。
4. 「ツメ字より移りやう。きつとつむれば音便叶ふ。の音はつめるかのむか。又はちと唱へて直に謡はぬ也。又訓のツは直に唱ふ。たまたまは。ツムルも。ノムも有  
   　勝ツ負　松ツ（略）  
   　山賤ノム　初ノム月（以下、略）」（上書：119）
5. 入声の所で句切や文の終止があって発音が休止される場合は、「惣して句読の入声字のつは皆呑て唱ふ定例なり（この条活版本にのみ見える）」。また「はひふへほの軟濁へ移るつの字は呑て唱ふ（改行）香（以下、3例省略）」。「英華抄の記載は玉淵集より一層詳細であると言える。」（上書：355,355,355）。
6. 蓮如上人の「御文の中には文明三年（一四七一年）より明応七年（一四九八年）ごろまでのものが集めてある。」（上書：236）。
7. 「一、つめ字ありてかきくけこの濁音につゝく時、鼻に入れていふ。さらねは屈は沓のことく聞ゆるやうに、葛は勝、吉はと聞ゆるやうにいふ。（中略）（改行）

一、つめ字にらりるれろをつゝくれば、舌を内に巻返すなり。」（上書：134）。

1. 「大体から言えば、次続の音が有声音の時（母音を除く）は、鼻的破裂音で、無声音の場合は促音になり、入声ツの所で休止する場合は、促音になることが多いと言える。」（上書：233）。
2. 入声tと次続音との関係が緩くなると、「平曲では一般に促音の方が多く用いられる傾向があるようであり、謡曲は鼻的破裂音の方が多用される傾きがあるように思われます。蓮如上人のいわゆる御文の唱え方では、謡曲とほぼ同じようであります。」（上書：243）。
3. 『金光明最勝王経音義』にみられる万葉仮名表記と同音字表記は次のようになっています（上書：131-2）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 万葉仮名表記 | 同音字表記 |
| 唇内入声p | 臘良布反 | 吸急反 |
| 舌内入声t | なし | 潔結反・蛭七反 |
| 喉内入声k | 博八久反・激下伎反 | 馥福反 |

また『金光明最勝王経』（西大寺本）では三内入声は「p　著六六　ノ一四（略、改行）

t　那四五　ノ一八（略、改行）k　養九ノ一（略、改行）の如く、規則的にフ・チ・クとなってゐる。但しk入聲の中に（改行）八六　ノ一〇（改行）という形があって、これのみキになってゐる。」（春日　昭和44：研究篇62）

1. 「（略）「チ」で書いたものはほかにはほとんどないようであります。「ツ」の方は、石山寺蔵の『高僧伝』（三条天皇の長寛元年〔一一六三年〕加点）あたりを最古として、それ以後の訓点本では大体「ツ」が普通に用いられているようであります。」（岩淵　昭和52：241）。
2. 「（上略）はねたる文字、入声の文字の、かきにくきなどをば、みなすててかくなり。万葉集には、新羅をばしらとかけり。古今序には喜撰をばきせとかく。これらみなその証なり（『新校群書類従』による）」（上書：149）。
3. 橋本氏の入声ツの音（鼻的破裂音：）を石黒氏は[tũ]、佐伯氏は[]（またkn）とされています。第6節、また注8を参照ください。
4. 「本文のかながきの方からいふと「つ」を記してある場合である（「あつて――앋뎨」（八ノ十オ））。これに対して、初声を重ねた注音の形式には、本文に「つ」が現れない（「あて――아뗴」（七ノ二十二オ））。」(亀井　昭和 59:364)。
5. 「　됴흘까（kka）시프와（七ノ十一ウ）

（右、本文「よう御さろうす」）

この場合、主としてはこの形であるが、またᄭᅡ（ska）の形でもあらはれる。

됴흘ᄭᅡ（ska）시프다ᄒᆞ니（七ノ二十ウ）

（右、本文「よそうなと申ほとに・・・」）」(上書:367)。

＊翻字は筆者。kka/skaは各自並書表記/合用並書表記で、ともにʔka（濃音、声門閉鎖音/ʔ/）とみられています。

1. toin-sios：「①‘‘ㅆ’’の名称。②他の子音に並書される‘‘ㅅ’’の名称」。toin-sori:「硬音。濃音。」（天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55改訂版：164,164）

＊ㆆ（声門閉鎖音/ʔ/）：『東国正韻』の「漢字音以外の表記にこの文字（筆者注：ㆆ）が使用された例は、世宗・世祖代文献において次の二つの場合に限られている。まず動名詞語尾の表記に見ることができる。horʔ kəs（すべきこと）、kənnəsirʔ cəi（渡られる時）。（略）そして次の二書では「間のs」（sa・i・si・os）の代りに使われた。『竜飛御天歌』　先考ʔptɨt（先考の意）、『訓民正音諺解』　快ʔ字（快という字）、那ʔ字（那という字）等。」（李　1975:133）。

1. すでに目ざとい方はお気づきのことと思いますが、「確かに」の当時の音がtaʃʔikaniであったなら、「こそ」（kosʔo）や「有って」（atʔe）が「고쏘」（kosso）や아뗴（’a-ttyəi）と表記されたように康遇聖は「確かに」にたいして다씨가니（tassikani）と表記したことでしょう。ではなぜ康遇聖は다씨가니ではなく、다시까니（tasikkani）と表記したのでしょうか。（簡単に述べておきます。）

康遇聖は「確かに」をtaʃʔikaniではなく、taSʔkaniのように聞いたと考えます。音節の切れ目を‘－’で表わすと、「確かに」（ta-Sʔ-ka-ni）の声門閉鎖音（/ʔ/）のあるS音（Sʔ）を康遇聖はSʔ-ka（시-가）ではなく、S-ʔka（시-까）のように聞きなしたために다시까니（tasikkani）のように表記したと思われます。このように考えると康遇聖が「確かに」をtassikaniではなくtasikkaniと表記したことをうまく説明できるでしょう。  
　では康遇聖がtaSʔkaniと聞き、tasikkaniと表記したSʔとはどんな音だったのでしょうか。『音韻断』(京都人の泰山蔚1799年)には「スはシと性格が異なるが、他のサ・セ・ソとは同質のものである。サ・セ・ソは、スア・スエ・スオと発音するのである」(三木・福永　昭和41:138)という記述がみえます。そこで「spa」(温泉)を「スパ」と書くように（また「「あります」の末尾のsuのuは,東京方言では消えて[arimas]に近く聞こえるが、大阪方言などでは「スー」と長めにきかれるほどsuのuがよくひびく。」（柴田　1988：630）ことも）、「スア」の音をSʔaとみればこの「ス」はSʔを表わしているとみることができるでしょう。そこで現在の「サ」はSʔa（スア）→sa（サ）のように変化したと考えることができるでしょう。このように当時の「確かに」の「シ」を現在のʃiに変化するまえのSʔとみれば다시까니（tasikkani）と表記された理由を説明できるでしょう。詳しくはもっと先の更新で考察します。

＊「「須須」と鳴いた雀はいま」（2012.4.17更新）　http://ichhan.sakura.ne.jp/saline/saline1.htmlの「８．江戸時代以後のサ行音をたどってみると」参照ください。）

1. 中古舌内入声を通説のtではなく、tʔと考えなおしても次のような疑問がわきます。

A．なぜ上古舌内入声はT→ti（呉音チ）、また T→tʔ→ tu（漢音ツ）のような変化をしたのか。

B．鴨長明が「かきにくきなどをば、みなすててかくなり。」（岩淵　昭和52：59）とした入声韻尾はなぜ平安時代ごろまでに開音節化（ti/tu）し、その後江戸時代ごろより再び開音節化（tʔ→tsu）したのでしょうか。舌内入声韻尾はなぜ先祖返りとみえる変化をしたのか。

C．連声（例：「今日は」　konnitʔ＋wa→konniQta）の変化から声門閉鎖音（/ʔ/）は促音（/Q/）に変化したとみられそうです。しかし音声学的にʔ→Qの変化は可能でしょうか。ʔとQとの関係（城生　1977：119を参照ください）はどのように考ればよいでしょうか。

D．謡曲のノムの発音は橋本進吉氏はとみられていて、そこには鼻音性があったとみられます。そこでもし→tʔの変化を考れば、その鼻音性（N）と声門閉鎖音（/ʔ/）の関係はどのようなものだったのでしょうか。→tʔのような変化は本当に起きたのでしょうか。

E.そもそも上古の舌内入声Tとはどんな音だったのでしょうか。

【引用書】

＊中国・韓国の人名は日本語読み。

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂

石黒魯平　昭和2年9月　「謡曲（観世梅若流）の発音に就いて」『音声の研究』（第一輯）　三宅武郎編　音声学協会

伊藤智ゆき　平成19　『朝鮮漢字音研究　本文篇』　汲古書院

伊波普猷　1974　『伊波普猷全集　第四巻』　平凡社

岩淵悦太郎　昭和52　『国語史論集』　筑摩書房

牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　昭和42　『中国文化叢書　１　言語』　大修館書店  
王天昌　民国58　『福州語音研究』　世界書局（台北）

王力　1985　『漢語語音史』　中国社会科学出版社

大島正二　1998増訂版　『中国言語学史　増訂版』　汲古書院

小倉進平　昭和50　『小倉進平博士著作集（三）』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会（ただし、太學社影印本（ソウル））＊国語及朝鮮語發音概説　南部朝鮮の方言他

尾崎雄二郎　昭和55　『中國語音韻史の研究』（東洋学叢書）　創文社

春日政治　昭和44　『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』　勉誠社

亀井孝　昭和59　『亀井孝論文集３ 日本語のすがたとこころ（一）音韻』　吉川弘文館

亀井ほか　1989　『言語学大辞典　第2巻　世界言語編（中）　さ〜に）』　亀井孝・河野六郎・千野栄一編著　三省堂

姜信沆　1993　『ハングルの成立と歴史』　梅田博之（日本語版協力）　大修館書店

京大国語国文研究室編　昭和47　『三本對照　捷解新語　本文篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大国語国文研究室編　昭和48　『三本對照　捷解新語　釋文・索引解題篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

金東昭　2003　『韓国語変遷史』　栗田英二訳　明石書店

詹伯慧　昭和58　『現代漢語方言』　樋口靖訳　光生館

佐伯功介　昭和2年9月・昭和3年（？）「謡ひの発音（宝生流）に就いて」『音声の研究』（第1・2輯）　三宅武郎編　音声学協会

阪倉篤義編　1990新装版　『日本語講座 第6巻　日本語の歴史』　大修館書店

柴田武　1988　『方言論』　平凡社

M．シュービゲル　1982新版　『新版　音声学入門』 小泉保訳　大修館書店

城生佰太郎　1977　『岩波講座　日本語　5　音韻』　橋本萬太郎ほか　岩波書店

庄司孝彦　1962　『中古字音索音手冊』　日本大学文理学部中国文学研究室　学術出版教育図書発行

白木進編著　昭和51　『かたこと』（笠間選書）　笠間書院　＊京の人安原貞室（1610-1673）著　1650年刊

高田時雄　昭和63　『敦煌資料による中國語史の研究』　創文社

千島英一・片岡新共訳　2000　『広東語文法』　スティーブン・マシューズ＋ヴァージニア・イップ著　東方書店  
趙義成訳注　2010　『訓民正音』（東洋文庫）　平凡社

天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55改訂版　『現代朝鮮語辞典　改訂』　養徳社

土井忠生訳註　昭和30　『日本大文典』　Ｊ.ロドリゲス原著　三省堂

土井忠生　昭和38年　『吉利支丹文献考』　三省堂（未読）

土井ほか編訳　1980　『邦訳日葡辞書』　土井忠生・森田武・長南実編訳　岩波書店

藤堂明保　昭和42　「1　上古漢語の音韻」『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館　＊江南書院　昭和32年の改版

藤堂・小林　昭和46　『音注 韻鏡校本』　藤堂明保・小林博共著　木耳社

外山映次　昭和47　「第三章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

中田祝夫編　昭和47　『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　大修館書店  
中本正智　1976　『琉球方言音韻の研究』　法政大学出版局

日本大辞典刊行会編　昭和50　『日本国語大辞典』第13巻　小学館

橋本進吉　昭和36　『吉利支丹教義の研究』（橋本進吉博士著作集　第11冊）　岩波書店　＊國字音譯文禄元年天草版吉利支丹教義（ドチリイナキリシタン：1592年　天草耶蘇會學林刊行）

橋本萬太郎ほか　1977　『岩波講座　日本語　5　音韻』　橋本萬太郎ほか　岩波書店

橋本萬太郎　1981　『現代博言学』　大修館書店

表章・竹本幹夫　1988　『岩波講座　能・狂言Ⅱ　能楽の伝書と芸論』　　岩波書店

[平山久雄　昭和42　「3　中古漢語の音韻」　『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店](javascript:open_window(%22https://ndlopac.ndl.go.jp/F/TBF9EUF92JKPXGSMVXB49RP1RUDTAN2NF4N2V36BEN1S1TA9C2-16901?func=service&doc_number=002078035&line_number=0042&service_type=TAG%22);)

[福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂](javascript:open_window(%22https://ndlopac.ndl.go.jp/F/TBF9EUF92JKPXGSMVXB49RP1RUDTAN2NF4N2V36BEN1S1TA9C2-16901?func=service&doc_number=002078035&line_number=0042&service_type=TAG%22);)

福島邦道　1990新装版　『日本語講座 第6巻　日本語の歴史』　阪倉篤義編　大修館書店

文化庁（文化部国語課）編　平成13（増補2版）『公用文の書き表し方の基準（資料集）　増補二版』　第一法規出版

三木・福永　昭和41　『国語学史』　三木幸信・福永静哉共著　風間書房

三根谷徹　1993　『中古漢語と越南漢字音』　汲古書院

李基文　1975　『韓国語の歴史』　藤本幸夫訳　大修館書店